一杯に取るのに殆んど充分であつた、之に加ふるに其の人の全時間と留意を集注するを要する程自ら大切である仕事をせんとするのは難かしいことである、貴公の御者に六頭の氣の立つた馬を御すると同時に狹い路を重い荷をつけた手押一輪車を押して行くことを貴公が期待してもかまはぬ。（未完）

譯者曰ふ、ライマンの報告をたどゝゝと直譯してゆくと、地質學の立場に立つて經濟を論じて行く必要は今も明治十年代と變らず寧ろもつとよけいにあると云ふことが感じられる地質調査書が純學術的になるのは尤もであると同時に段々に公けの出版物の中に應用地質の材料を記述することが減じてゆくのは國家事業としての地質調査の一方の價値をそぐものである。又他方では經濟學者が地質調査書を理解出來ぬ程に地質學が勝手に進んで行つたものならば、地質學家がライマンの樣に地質調査の結果を基礎として經濟を大に論じて以て邦家を益すべきであると信ずる。こゝに偶感を附して識者の一顧を乞ふ次第である。

伊太利ところ〴〵（十一）

瀧川規一

【ポムペイの死都】往來に人影稀な日曜日の晝間は倫敦、殊にシティと呼ばれる舊倫敦は死人の町を行くが如しとは誰しも口にする處である。店と云ふ店は悉く閉つて居る。餘程勝手を知つた者でなければ飲食店を見出し得ない。辨當持參でなければ餓死するであらうとさへ云つた米人があつた。綠樹を見ず人影を見ざる大都會の物淋しさは曜日の雜沓に對照して殊更に著しく感じられる。これは生きた都會の話であるが、ポムペイの小都會は事實紀元七九年に死んで居るのである。同年の十一月の二十三日に東の空に高く聳えてゐるヴエスヴイアス山は突然

爆發した。その數時間以内に全市が滅亡した。然かも都市全部が地下に埋沒し一七四八年の最初の發掘が始まるまで殆ど千六百六十八年の間は人の記憶から去つてゐたのである。勿論埋沒當時にも埋れた貴重品を掘出す爲めに此處彼處掘られたことがあるが、それ以來人知の埒外にあつたと云つてもよい。それが初めて發掘されて以來今日猶發掘を續けられてゐるのである。今日では略市の大半が發掘されて古代の都市の面影を忍ぶには充分である。酷暑炎天の晝間であつたが、汽車の停まる毎に吐き出されるこの死の都を見物する世界の人々の多いのに驚いたのである。市の家屋は只徒らに圓柱を天に曝らし屋壁を雨露に霑ほす儘にしてゐるのであるが世界各國から集る見物人は死の都の往來に殆ど列をなす程の賑かさである。若し夜間月光を浴び見物の雜沓を避けて只獨り死の都の物靜かさと物淋しさを心ゆくまで味ひ得るならば、その有りし昔の殷盛と豪奢にして風雅、逸樂と興味に富んだ古代人の都市生活とを眼前に彷彿たらしめることも出來るであらう。

實に誰かが云つたやうにポムペイは小都會ながら當時の文明の縮圖であつた。金力勢力の凡ゆる權力所有者は何憚る處もなく贅澤と逸樂とに耽り得た。發掘された家屋建物によつて想像するに、彩色濃厚なる小宮殿と云ふ可き富者の邸宅がある。小さく耀びやかな店がある。市民の娯樂場の一であつた公衆浴場がある。公會の會堂がある。劇場がある。圓形闘伎場がある。各種の職業商賣を營んだ大小の店舗がある。寺院の殿堂がある。墓地がある。葬儀場がある。官權有力者の住家であつた御殿がある。娼家の一區域もある。恐らく今日廿世紀の大小の都會と雖も大した差異がなからうと思へる程に都市集團的生活の必要條件が具備してゐる。

抑もこの理想的都市はいつ頃から出來たかとの問題に對しては誰しも今日滿足な解答をなし得る者がない。只史的推論らしき解答しか出來ないのである。紀元前九世紀頃には伊太利半島の中部南部の沿岸には、今日のシリア・パレスの

タインの地方の住民であつたフェニキア人が各地に殖民地を作つてゐた。然るに今日でも伊太利北部の錐形の山々の山腹或は頂上に遺族が生存して小都を作つてゐるエトラスカン族が北部から中部に押し寄せ更に南下し、フェニキア殖民と接觸し、紀元前六世紀になつては兩者協力して、兩岸に於ける希臘の殖民と戰つてゐる。ポムペイの發掘物には紀元前七・六世紀頃のものと思へるドリア式の殿堂がある。これから察すると、この頃には希臘人はポムペイにも殖民し勢力を奮つて居たことが判る。兎に角紀元前五世紀の末頃にはエトラスカン族は中央伊太利の山間に棲息した種族であるオスカン族に屬するサムナイト族の爲めにポムペイから驅逐されて居る。このサムナイト族と羅馬との戰爭は五十年以上の久しきに亘つて繼續されたが羅馬の權勢益强くなり紀元前八九年には一旦羅馬軍の圍が効を奏しなかつたけれども、紀元前八三年以後になると、羅馬軍は希臘侵入に大勝を得、その勢を以てカムパニア地方全部を羅馬に服從せしめてゐる。軍將スラ(Sulla)は紀元前八十一年には獨裁者となり、羅馬に於ける反對派を片付け、反旗を翻へしてゐた伊太利諸族を平げその都市を荒廢に歸せしめた。紀元前八〇年にはポムペイは羅馬に屬する小都會となり、スラの甥の支配の下に羅馬は軍人等の殖民地となつた。スラの甥はポムペイの支配者となり緩急宜しく手腕を以て羅馬の殖民軍人と在來の市民との絶えざる衝突を巧に治め得たと云はれてゐる。以上の事情からも察し得らるる如く埋沒したポムペイの町は羅馬希臘の要素から成立してゐるのである。

都市の位置としては海岸より遠からず、酷暑の候と雖も海から吹き來る微風が酷熱を和らげ保養地として好適の地である。小さき灣の海の面は鏡の如く水清く澄み常に穩波をたゞへ、商船は輻輳し、富者の遊船またその間に賑かに往來し、ポムペイの市民を顧客とする漁舟の群が集ふ。海陸を兼ねた歡樂の都であつたと云ふても過言ではあるまい。港灣を護るに提督プリニ

の率ゐる小艦隊があり、都市の巷には或は難船の模樣や、航海者に常に親しみを寄せる海豚の話をする水夫が居つて、聞き耳立て易い都人の一群を周圍に集め得て居たであらう。都人はまた或は小さき都會の天地に美貌を以て評判の若き娘の噂又は富者の招宴、招宴に話された趣味談を繰り返へして興味を更に增したであらう。弱勢派であつた希臘の青年は父子代を代へても猶血脈に流れてゐる憤懣の心を抑へながら、若き娘等がヴェールを半ばあげて見せる同族の黑眸の笑顏に戀を感じたであらうし、强者たる羅馬人は奴隷を驅使して意氣揚々たるものがあつたであらう。小都會ながら文明の、否羅馬帝國の小模型であつたと思はれるこの當時の都會生活を一々の家屋建物によつて空想を走らす時、吾々の眼前には今日のトーキの如く進歩した社會の活畫を耳からも目からも、また心からも再現し得るのである。羅馬も亦ポムペイ以上の廢墟や發掘の場所がある。然しその廢墟には現存せる近代人が都市の面目を繼續し、古代の建築物の蔭、古代の餘りに赫々たりし歷史の蔭に、奮鬪の生活を續けてゐる。同じく獨裁政治とは云ひながら、今日までの結果から判斷すれば、ムソリニの功蹟と雖も迚も古代羅馬の全盛には及ばない。家運傾いた後をうけた孝行者が地密の奮鬪をつゞけ家運挽回に努めてゐるが、祖先の大に到底達し得ないと等しい有樣が羅馬である。ポムペイに至つては全く後繼者が無い。只後繼者としてはポルタ・マリナ（Porta marina）の博物館に陳列されて居る發掘の石化した髑髏である。後繼者なき廢墟の都市を見る時、人の心は益空想を逞し想像追憶の念に驅られる。ポムペイの現存物は噴火山の怒の下に生命財產をあへなく棄てた遺物ばかりである。若し日本の如く木造建築であつたならば、恐らく何等の遺物をも止めず人世の運命と共に永遠に、文字通りに忘却の國に入つたであらう。幸運にも後世人に傳へ得たとしてもそれは只口碑若くは傳說としてであり、茫漠として捕捉し難いものであつたであらう。

こんなことを想ひながらポムペイに急しき見物をする。Colonia Veneria Cornelia Pompeianorum と云ふ長き名のついたこの小都會、これを畧して吾々は單にポムペイと云ふ。不要なる衒學的說明ではあるが、筆者自ら好奇心に驅られてこの長き市名を說明して見る Cononiaは既述の如く羅馬の兵士が殖民となつたが故に付けられたのであり、Veneria はポムペイの町の守護神である女神 Venusの名から語尾の變化によつて Veneriaとなつたのである。

この Venus の女神はポムペイでは豐穰多產幸運の神である。產兒制限の聲喧しき今日多產は必ずしも幸運を伴はないと云ふのは全く最近の尖端的思想である。昔は多產、豐穰は幸運と始終するものであると考へたのである。多產幸運を一緒に連關して考へ得ない人間は既成社會の破壞を考へる。Corneiaは羅馬の獨裁支配者スラ將軍の甥でポムペイ市の獨裁支配者である L. Corneia Sulla の家族の名即姓である。

氣候も上述の如く健康に適し、周圍の土地は地味肥沃であり、農產物及びその他の食物に富み、海陸の便と都市の娛樂物とを具備してゐるので、羅馬の名門の人々はまたこゝに別館を設ける者が多くあつた。例へば皇帝 Claudius、雄辯家の Cicero 及び羅馬の元老院から逐ひ出された L. Regulus と云ふやうな史上で有名な人物はポムペイ市或はその附近に別邸を所有してゐた。

紀元後五九年には圓形闘伎場で、闘士の果し合ひがありポムペイの見物人とヌセリア市の見物人とが大喧嘩をやり血の雨を降らすに至つたので、當時の皇帝ネロは闘伎の勸進元を市から逐ひ出し、前述のレグラスも亦市から逐ひ出された。

ポムペイ市が埋沒したのは紀元後七九年のことであるが、それ以前にも大地震があつた。羅馬の史家の傳へる處ではヴエスヴイアス山は有史以前から死火山であつた。然るに紀元前六三年の二月の五日にヴエスヴイアスは突然活躍をはじめ附近一帶に大地震を起した。その時には

寺院や家屋が大破し立像記念碑等が倒れ莫大の損害を與へた。然し再興事業が速に行はれ、女神アイシス(Isis)の殿堂は富者の寄附によつて再建され、ヴィナスの殿堂も再建され、公會堂の圓柱も建て直された。私人の家屋に出來た龜裂の壁は塗りかへられ、凡てが當時にとつて近代的になりそれ丈け趣味の低下を見たと云はれてゐる。ジュピタの神の胸像は非常に大きなものであつたらしいが、その石材を用ひて小型の像を作らんと鑿を入れ始めてゐた時に、上述の最後の爆發が起り、人も町も暗の世界に葬られたでのある。

この慘劇の目擊者で生殘つた者が居る。その名を Plinius Cæcilius Secundus と云ひ、紀元六二年に生れてゐる。埋沒の起つた時は彼は十七歳の青年であつた。當時ヴェスヴィアス山の西三〇キロメートル許りの處にあつたミセナム(Misenum)と云ふ町に居つた。この町はナポリ灣の海角にあつた。彼は當時の史家 P. Cornelius Tacitus に宛てた二通の手紙に彼が得た恐ろしい印象を書いてゐる。彼の伯父の Plinius は艦隊の指揮官であつて、ミセナムの沖に碇泊してゐた。震災の起るや罹災者救助の爲めに船を廻しポムペイ附近の、ハーキュレーニアム(Herculaneum)に上陸せんとしたが出來ないので今日のカステラマーレ(Castellamare)當時のスタビエ(Stabiae)から漸く上陸し得た。然るに毒瓦斯の爲めに假死狀態に陷つたと云ふ。

當時のポムペイ市民は二萬ばかりであつた。そのうち二千人ばかりは二日間降り續く輕石と火山灰の爲めに生埋めになつた。雷鳴轟々と鳴り響き、空は黑煙に蔽はれて、日の輝く晝間は暗夜と化し、最初の震動によつて殿堂や公共の建築物をはじめ民家の倒壞夥しく、市の南部には小さき輕石が十何尺と降り埋め後には雨交りの火山灰が降り來つて十尺以上もその上に積つた。同時にヴェスヴィアスの南の斜面から泥が流れ來り、ハーキュレーニアムの町を六十尺以上も埋めて了つた。

汽車で通過する沿道の村落田野にこの泥の硬

化せるものを今日も猶見るを得、當時を想像して悚然たらしめる。幾世紀の歳月を經る間にこの泥、灰、輕石が堅き岩と化し、ハーキュレニアムの町の如きは今日發掘を困難ならしめてゐると云ふ。

ポムペイの多くの市民は爆發の起るや否や、或は時を經ずして町から逃れ出で、船或はその他に避難して命が助かつた。然しポムペイの港附近でサルノ(Sarno)河の河口では避難者の多くの骸骨が發掘されて一部は既述の博物館に石化の安全像を曝露してゐる。彼等は逃げる際は多く貴金屬寶石貨幣等を持つて逃げたらしい。

爾來今日まで星霜を經ること略二千年。ポムペイの市街はヴエスヴイアスの噴出物で埋つて人の目から隱れたまゝであつたのが、既述の如く十八世紀の中頃になつて水渠を掘らんとして意外にも古都の存在を知るに至り、一七四八年に發掘が開始された。その時に知り得たのは災害後間もなく貴重品を發掘せんとて掘り出した跡があつたことである。皇帝タイタス(Titus)はこの災害後直に市の復興を企てたが莫大の費用の爲めに目的を遂行することが出來なかつた。

發掘は以前は無計畫で行はれてゐたが、十九世紀の半以後からは發掘物保存を目的として、以前の縱掘りでなく水平掘りの方法をはじめてとつた。

今日ではナポリの博物館の監督の下に發掘を繼續され、最新發掘の場所は未だ一般に公開されてゐない。兎に角今日漸く全市の三分二以上を發掘し了つたばかりであると云ふ。

一般觀覽を許された部分丈けを見物するにしても隨分廣大であるが、各種の建築物によつて埋沒以前のこの都市の生活を想像して見るも興味がないではない。幸にも故國にありし頃屢讀んだ十九世紀前半に榮えた英國の小說家 Bulwer Lytton の有名な小說がある。

一八三四年に出版され題して「ポムペイ最後の日」(The Last Days of Pompey)と云ふ。この小說の記憶によつて、ポムペイの死都は吾々には生都であり、この小都會に起つた戀愛の渦

と各種の建物に出入せし人間の生きた姿と、最後の慘禍の光景とは具象化されて眼前に展開する。

ポムペイに人もすなる見物をしたが、扨て何を見て歸つたか。暫く讀者の耐忍を乞うて、小説と發掘物と併行して、筆者自らを再び案内して見たい。

新著紹介

○小川博士還曆記念論叢　京都　弘文堂發行

小川博士の還曆記念の論文は非常に多數に集まつたゝめに印刷所の進行意の如くならず、還曆の祝日に後くれること數ケ月にして、本年十月二十八日漸く版行せらるゝに至つた、之を二部に分つて、第一部は歴史及地理に關した論文を集めた今其要目をあげると支那古代の稻米稻作考「岡崎文夫」人文傳播に關する一考察「喜田貞吉」古文尚書に關する一二の小研究「神田喜一郎」讃岐の人口稠密なる原因の一部に就て「寺田貞治」公羊疏作者時代考「狩野直喜」盛壁考附瓊璣「濱田耕作」唐光啓元年書間沙州伊州地志殘卷に就て「羽田亨」唐代圖州廻城疆域考附營州廻城考「那波利貞」元和航海記航路の研究「藤田元春」元代奴隷考「有高巖」考古學上より見たる漢代文物の西漸「梅原末治」露蒲關係の研究「下田禮佐」近世に於ける耕地荒廢と小作問題「牧野信之助」先史學史の一節「小牧實繁」桂女の研究「江馬務」伊賀に於ける聚落の研究「村松繁樹・キルギス、ステップ地方の景觀「宮川善造」八思巴文字に寫された漢文音「鶯淵一」我南洋諸島に於ける氣候と着衣問題との關係を論ず「内田寛一」琅玕考「新村出」港市としての坂本「中村直術」陽明詩「高瀬武次郎」賈魏公年譜「内藤湖南」ペトルス、アピアヌスのコスモグラフィア最初の諸版について「小野鐵二」九州地方聚落の人口地理的考察「石橋五郎」の二十六篇、四六倍大版一千三〇五頁に達する尨大なる册子になつた、定價十圓。

第二部は理學部關係の人々の論文であつて、その題目は、土城中の鐵結粒「脇水鐵五郎」宇部炭田地質時代の對比「德永重康」第四紀層の續成作用について「西尾鉦次郎」鑛物の結晶形と化學成分に就て「石川成章」臺灣第三紀有孔虫岩の層位學的研究「矢部長克、半澤正四郎」駒ケ嶽火山爆發によりて生じたる鹽化アンモニウムの成因に關する一考察「神津俶祐」噴火と植生「那場寛」伊豆國土肥鑛產金銀鑛脈の成生並に二次的銀鑛の成生に就て「加藤武夫」大阪市地質概觀「山根新次」玄武岩の磁性に就て「松山基範」花崗岩に於ける角閃石と黑雲母との關係に就て「坪井誠太郎」北海道西部の地體構造と火山の分布「渡邊萬次郎」地下硫化鑛體の帶電原因に就て「松原厚」滿洲產菱苦土岩中の桂狀體及桂狀構造の觀察「新帶國太郎」關東南部の洪積層「福山次郎」本邦に於ける火成岩地質學の諸問題「本